慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和七年度春期研究旅行記
Sub Title	
Author	森, 貞成(Mori, Sadashige)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.158(486)- 160(488)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和七年度春期研究旅行記

（目的地）宇都宮市、大谷、長岡方面

昭和七年六月五日（日曜日）曇少雨。

午前七時、上野驛集合。古部教授以下教員學生十五名、伊木講師の來會を煩はして一行十六名。午前七時二十分發横手行列車にて出發。午前九時四十分、少雨の宇都宮驛に到着。直ちに下野史談會幹事田代善吉氏の好意に任せ、其東道に從て、先づ清水町の清嚴寺に赴く。

境内に國寶鐵塔婆一基あり、高さ約二丈、幅一尺、厚さ二寸許りにして、上部に彌陀三尊像及梵字を表はし、下に偈文あり、正和元壬子年八月の銘を認め得。正和元年は花園天皇の御代、北條高時の執權時代に相當し、西紀一三一二年なり。下野守宇都宮貞綱の建立に係ると傳ふ。尚ほ當寺には、傳良𠮟筆顯無邊佛土功德經一卷を藏す。

次で市内馬場なる國幣中社二荒山神社に參詣。延喜式内社にして、下野一宮たり。豐城入彦命を祭神とし、往昔鎌倉幕府の崇敬を蒙りたる傳あり。本殿裏山は前方後圓墳にして本殿脇より其一部を窺ふ。發掘品として朝鮮式土器片の出土せるものありと聞く。尚ほ、當社には建治三年二月八日（一二七七年）の銘を其背に有せる鐵鑄製狛犬、刀劒、古銅印、鏡鑑、槍身、土器、陶器、千手觀音像殘缺、錫杖、金銅瓔珞、鰐口、經筒、獨鈷形飾金具、古瓦等の所藏品あり。

此處より杉原町なる縣廳を訪ひ、下野國分寺址、藥師寺、長岡百穴等より出土の繩文土器片、正和在銘の青石塔婆（板碑）、金環、鐵鏃、須惠土器片、古瓦、金銅經筒、或は正安銘の骨藏器等を展觀す。縣廳の好意を謝して、下野新聞社に少憩し、屋上より市内を展望し、紀念撮影の需に應じ、附近にて晝食を攝る。

午後自動車を驅つて、宇都宮市を北に距る一里許りなる豐郷村長岡に赴き、所謂長岡百穴を見る。粗面の岩丘に、口徑三、四尺平方、奥行五尺乃至一間許りの窟を穿ち、正面の壁に總高一尺乃至二尺の佛體を半肉彫とせるものにして、穴の實數は田代氏の調査によれば、總數五十といふ。其製作は比較的後代のものゝ如く規模も亦大なりとは認むる事を得ざるものゝ如し。之より市内に引返し、更に車を驅つて大谷石窟佛を拜せんとす。石窟佛は宇都宮市を西北に距る二里弱、城山村荒針大谷に在り、天開山大谷寺の寺門を潛つて至る。此大谷石窟佛に就ては、内務省の史蹟指定に付、柴田常惠氏の報告（栃木縣に於ける指定史蹟）あり。就て見るに、所謂石佛と稱するは畿内及九州北部に在るもの多く世に知られ、中には製作の優秀なるものありと雖も、大谷石窟佛は關東方面に於ける此種の代表的のものに屬し、殊に其製作優秀にして、比較的善く保存せられ、特に佛體に粘土を張付けたる跡の見らるゝ如きは殆んど他に類例を見ざる所なり。即ち自然の一大洞窟を

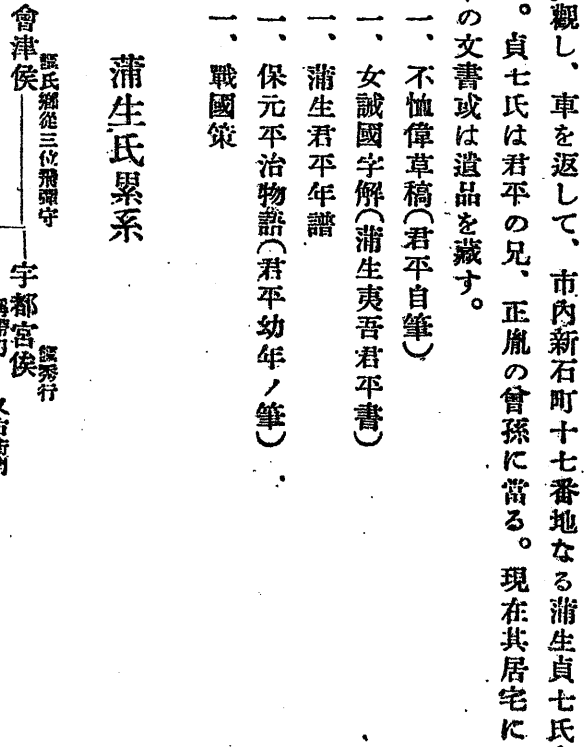
利用し、之を整理して岩窟に佛像を半肉彫とせるものにして、其壁面を大小の四區に分ちて、凡て十體の佛像を彫刻せり。第一區に於ては立像の千手觀音あり、今之に堂舍を設備し、像前に壇を設けて本堂を爲し、像を以て主尊と拜す。像の身長十三尺餘、製作最も優秀なれども嘗て文化八年火難に遭ひ、損傷する所あり、粘土の剝落するもの甚し。

第二區乃至第四區は第一區の向て左方に在り、脇堂を設備す。第二區には坐像の釋迦を中に、立像の文殊、普賢の兩脇士、三體を見る。釋迦の總高約十一尺。脇士は夫々十二尺乃至十三尺餘あり之に並ぶ第三區には藥師(坐像)日光、月光(立像)の三體あれども、總高何づれも四尺餘に過ぎず、製作手法にも亦特に優れたる所を認め難く、他と少しく趣を異にするもの丶如し。第四區に於ては彌陀の坐像を中に、觀音、勢至の二菩薩脇士として立つ。彌陀は總高約十尺、二菩薩は夫々十尺乃至十一尺餘にして、第二區の釋迦三尊と相似たる所あり、總じて火難の厄を蒙る事薄かりしもの丶如く、粘土の工合も比較的判然し、加之、上部には七軀の化佛を遺し、又觀音の向て右側の壁面には、顏料に依て描かれたる數軀の坐像佛體ありし痕迹を存し、更に是等の顏料に依て描かれたる佛像の上手には、粘土を極めて薄く張付けし立像の佛體(總高四尺餘)一軀あるを認む。尙ほ、佛體の彫刻に於ては岩面の彫刻のみに依る事なく、被覆する粘土を以て尊容を整へし工合の釋迦、彌陀兩三尊に於て最も善く窺はれ、千手觀音、藥師三尊の面相稍〻不明なるは寧ろ上被の粘土に依て修補されたるもの丶如く、必ずしも之を以て損傷の爲めとのみ爲すを得ず。更に此粘土の上には顏料を施して彩色せる工合の認められ、また彌陀の後背の如きは粘土を張りて造りしもの丶如く、其剝落せし工合の明白に殘るものあり。是等の製作年代は大體に於て弘仁期より平安期の間と認めらるゝも、就中千手觀音を以て最も古く、釋迦、彌陀兩三尊を以て之に次ぐものと爲すを得べし。藥師三尊に於ても亦、其年代は釋迦、彌陀の年代と殆ど同時代に見るを得べきか。

終つて附近の大谷石產地特有の奇景を賞し、採掘場の實景をも參觀し、車を返して、市內新石町十七番地なる蒲生貞七氏宅を訪ふ。貞七氏は君平の兄、正胤の曾孫に當る。現在其居宅に君平自筆の文書或は遺品を藏す。

一、不恤偉草稿(君平自筆)
一、女誡國字解(蒲生夷吾君平書)
一、蒲生君平年譜
一、保元平治物語(君平幼年ノ筆)
一、戰國策

蒲生氏累系



一、修身要錄
一、古今詩歌集
一、移封記（安永二年）
一、君平筆書トリアツメ、（扉ニ蒲生氏累系アリ）
一、徒然草　甲乙二册
一、李嶠雜詠
一、今書　版本（下野蒲生秀實著、出羽筒井明俊校）
一、孟子
一、職官志　版本（秀實校）
一、山陵志　九志二ノ一　版本（秀實校）
一、山陵志原稿　（君平自筆）　一卷
　ハジメノ部分ハ八行詰小形罫紙
一、謠曲集（君平自筆）
一、山陵繪圖　着色四枚一帖
一、山陵志答辯書　（木版刷）
　（奥書）　文化五年冬十一月廿四日浪人蒲生伊三郎
　　御役所樣
一、職官志彫刻の事　（木版刷）
　　十一月十四日付　蒲生伊三郎
　　鈴木先生座前
一、山陵志の事依頼　（木版刷）
　　十一月廿八日付　岡井仁右衞門充書狀
一、矢立（菊紋章付）　墨壺ニ墨肉アリ
一、硯
一、合羽　身丈三尺、身幅一尺六寸五分
一、裁着　襠下三尺五寸
一、笠　徑一尺九寸六分五厘　ソリ一尺一寸

以上蒲生家の好意を謝して辭去、淸住町なる桂林寺に至り、蒲生君平の墓に詣づ。墓碑面に、文山義章居士とあり、側面には、贈正四位修靜院殿文山義章大居士とあり。尙ほ、足利銀行新石町支店玄關脇に、蒲生君平誕生之地を表はす標石あり、傳により建てて以て紀念と爲す由。

豫定に於ては更に一向寺の國寶阿彌陀像拜觀の筈なりしも、時刻既に夕暮を告げたるを以て、遺憾ながら割愛し、直ちに停車場に向ひ、午後六時廿三分發列車に投じ、午後八時十分上野驛着歸京、卽時解散せり。（森貞成記）

ヤミ族使用の船

槇智雄教授の好意により、臺灣紅頭嶼居住ヤミ族使用の小船が史學會に寄贈された。高雄在住柏尾具包氏より山中湖に浮べて學生の使用に供するため送附されたるものにて槇氏は、その重要なる土俗學的資料なるを認めて今回本塾に轉送し、本會は、之を本館三階新設陳列棚の上に安置して、大切に保管することとなつた。船の長さ十三尺四寸、幅二尺六寸五分、船腹の高さ一尺五寸、船首及び船尾の高さ四尺二寸、二本の櫂（長さ七尺、あかとり、其他の備品を備ふ。船腹には黑、白、朱の三尺にて裝飾を施し（白色及び朱色の塗料は既に剝落す）、人體、圓形（太陽の象徵なりと云はる）三角等の原始的の模樣を附す。之等の紋樣太平洋上遠くニュー・ギニア邊まで分布するものにて太平洋文化史上極めて興味がある。船は組立式にて船體各部の用材を異にし、頗る進步せるもの、ヤミ族の祖先は、恐らくかくの如き船にて遠くフイリッピンより移住し來れるものであらう。